

座談会

ポスト毛への過渡的体制

十全大会からみた中国の内政・外交

中国共産党はさる八月二十四日から二十八日まで五日間、北京で第十回全国代表大会（十全大会）を開催、林彪事件の総括を行い、党規約を改正し、新中央委員、同候補を選出して、新しい党指導体制を確立した。中国共産党は中国の政権を握る政党であり、党全国代表大会は党の方針や政策を決定する最高権力機関であり、今後の中国の進路を打ち出す重要な意義を持っている。そこで十全大会の意義と今後の内政・外交の方向について中国問題の専門家である中嶋嶺雄、豊原兼一両氏に語ってもらった。

井上 今度の党十全大会は八月二十四日から二十八日まで五日間、北京で開かれましたが、前回の十全大会（六九年四月一日から二十四日まで）に比べてきわめて短期間で、また会議そのものが秘密のベールに覆われて、事前に公表されなかったことなどから、異例の会議といわれていますが、この点について……。

豊原 もともとこの十全大会の大きなねらいは、いわゆる林彪事件の結末をつけることにあると思います。この林彪事件というのは、二年前の七一年七月に、林彪が毛沢東主席を暗殺しよう

として失敗し、ソ連に逃げる途中、飛行機がモンゴルで墜落して死亡したという事件です。

この事件で共産党は非常にショックを受け、これを契機に、全国で、全党、全軍、全人民の間で、いわゆる「批林整風」つまり林彪を批判し、思想

を整える運動を展開してきた。これは二年間かかったわけですが、この二年間の間に下部からの盛り上がりですでにできていた。このことは中国共産党機関誌「紅旗」八月号にも「批修整風運動は偉大な勝利を収めた」という論文を発表していることからもうかがえます。

そういう前提を踏まえての党大会だったので、会期も短かったのではないかと思います。しかし秘密裏に開いたということは、何か疑問が残りますね。

中嶋 中国で新しい党大会が開かれるだろうという予測は、このところしきりだったので、それがこういう形で開かれ、いわば意外な大会だったと思います。いま豊原さんのおっしゃったことはそのとおりだと思いますが、同時にこれまでの中国共産党の一〇回の党大会を振り返ってみると、特に七全大会以降、いわば毛沢東体制が本来



左から中嶋、豊原の両氏

的に機能し始めた党大会から振り返ってみると確かに今回の大会は、期間といい、さまざまな問題で非常に異例ですね。

普通、党大会というと、代表の選出がズーッと進み、九全大会のときでも、下部からの代表の選出が進んでいることが外からもわかっていた。

そのうえで党全国大会が開かれ、一カ月前後、二〇日間以上、あるいは四〇日ぐらいつづいた。したがって、そういう長期間、しかもかなり事前に発表して行われるという予測を一般には立てていたと思います。ですから今度の大会は、ある意味ではまったく突然開かれたような感じを受けるわけです。

党大会というのは、中国全体の今後の政治方針なり、外交方針なりの根本になるわけで、そのことから考えると、今度の大会は内政的にはまさに林彪批判一色、対外的には

出席者

(敬称略)

豊原兼一 (NHK解説委員)

中嶋嶺雄 (東外大助教授)

《司会》 井上昌三 (本誌編集長)

(レストラン・キャッスルにて
昭和四十八年九月三日)

対ソ批判一色ということであって、そのためのいわば儀式、一大キャンペーンであったという色彩がどうしても強い。

一方、振り返って見ると、九全大会から今日まで内政的には林彪事件もありましたし、批修整風運動、対外的には例の米中接近から始まった中国の国運復帰、それから日中復交、ベトナム和平と非常に内外情勢が大きく変化し、流動化している。その中で中国もいよいよ本格的な経済建設に着手しつつあるわけですが、当面の中国が抱えているその辺の基本的な問題について、十分に討議されたということではなかった。そこに大きな特色があり、またある意味では非常に異例なキャンペーン、儀式だったというふうに感じられるわけで、本来の党大会の姿からみるとこの点でかなり異例だというのは、単に形式の問題ではなくて、内容的にもそういうことがいえるのではないか。

これは周恩来の政治報告を読んでも、いまいったような問題で十分な討議がなされた痕跡はないし、ましてや第四次五カ年計画ほかの経済建設について言及がなかったということ、ここに今度の党大会の大きな性格、あるいは従来の大会に比べ特異だといえるのではないかと気がします。

再団結図り問題凍結か

井上 今度の党大会にあたっての林彪批判については、すでに二年ほど前から全国で、批林整風運動を展開して、すでに根回しはできていた。今度の党大会はそれに決着をつけるキャンペーン、儀式的なものだったということ。また党規約の改正にしても、林彪副主席が後継者というところを削除しただけで、全体の規約の大筋は変わっていない。それから党の路線についても、九全大会で決まった路線は正しかったとし、今後も踏襲するんだということで、改めて今度の十全大会で新しい路線が協議されたような形跡が見られないことなどから、比較的党大会そのものが事前に根回しされていて、具体的な問題を討議して激論を交わすほどのものではなかったのではないかということも考えられると思います。

豊原 周恩来の政治報告を見て、林彪事件については、すでに一年ほど前から国内で流れていたとおりであって、新味は乏しかったと思います。ただ九全路線の継承ということについては、九全



豊原氏

大会での政治報告は林彪がやった。つまりそれもとにしてできたものが九全路線ですが、この九全路線を正しいというためにはどういう理由づけをするかということに興味を持っていました。

ところが実際には、あの九全大会での政治報告は、毛沢東主席自らが中心になって起草したものである。そして林彪と陳伯達が共謀して、別の政治報告を起草していた。これが党中央の反対にあった。林彪と陳伯達の政治報告というのは、実は革命を中止して生産第一でいこうということだったんです。この辺は全く新しい事実ですね。外国に流れてきたニュースだけから判断すると、むしろ林彪、陳伯達は極左路線をたどって、文革推進派というふうに伝えられていた。林彪事件のあとに、鄧小平をはじめとするいろんな旧幹部の復活も、そういう極左路線で批判された人物が、林彪がいなくなつて浮かび上がってきたように伝えられていたのですが、その辺は間違っていたという新しい事実が出てきたと思います。

中嶋 なぜこのような儀式、いわば非常に短期間で準備された課題をサツとやってしまったか、それは現在の中国共産党に問題がないからそう言ったということではなくて、私はむしろかなり当面の経済建設の基本方針なり、社会主義革命の基本方針なり、あるいは対外政策、その他についてもまだ問題がいろいろ残っていると思います。それで林彪批判および対ソ批判ということであれば、これは最大公約数で、だれでも一致し得るわけですから、その点で再団結を図って、問題を凍結したという感じがどうしても捨て切れません。これは同時に周恩来の政治報告自体が、今後の一〇回、二〇回、数十回にわたる闘争を強調していることから見ても、やはり問題は残っている。

林彪事件の真相は不明

井上 今度の十全大会の最大の目的は、林彪事件の決着をつけることであつたといえると思います。これまで林彪一派については、すでに批林整風運動などが全国的に展開されていましたが、その当時はまだ「劉少奇のたぐいのベテンス」 という形で批判されていた。公式に「林彪反党グループ」と名指して批判されたのは、今度の党大会が初めてではないかと思えます。

結局、林彪と陳伯達ら林彪一派のものは、党籍を剥奪されて永久に追放となつた。党規約では林彪を後継者とするという項目を削除してしまうと

いうことになったわけですが。

林彪事件について政治報告でいわれていることをザッと申し上げますと、一九七〇年八月、第九期中央委員会第二回総会で、反革命のクーデターを起こしてそれが未遂に終わった。それから一九七一年三月「五七一工程」、いわゆる反革命武装クーデターの計画を立てた。そして九月八日に、その反革命武装クーデターを引き起こして、毛主席を殺害し、別の中央委員会を樹立しようと図った。それが失敗に終わって、九月十三日にソ連に逃亡しようとしてモンゴルのウンドルハンで墜落して死亡したということになっています。

ここで疑問に思うことは毛主席の親密な戦友といわれ、しかも前の党規約で後継者に指名され、毛主席に次ぐ最高地位にあった林彪が、なぜ謀叛をはかり、毛沢東主席を暗殺しようとしたか、この重要な点がまだはつきりしていないように思われるのですが。

豊原 政治報告によると、なんと彼は入党以来右翼主義者で、反毛路線をたどってきた、といわれている。とすれば、九全大会での規約では、林彪同志は一貫して毛沢東思想の偉大な赤旗のもとに、毛沢東路線をたどってきたとされておられ、だからこそ後継者とまで規定された理由がわからない。しかも先ほどちょっと触れたように、別の政治報告を起草して、それが党中央で否定された人物にもかかわらず、あの段階で後継者に選ばれた

ということとは、どうしても疑問がぬぐえないと思います。

この点については政治報告では詳しく述べていません。おそらく批林整風運動の段階で正式な罪状というものは公表されていると思いますが、外部の者にはあれだけの説明ではどうしても納得できないものがあると思います。何かそこに隠されたものがまだあるような気がしてしょうがない。

中嶋 政治報告でもいっていますけど、中央委員会が林彪および陳伯達の党籍剝奪について全会一致で決議した、というんでしょう。ということになると、おそらくかつて高崗事件のときのように、反党同盟に関する決議のようなものがあるに違いない。それが公表されるかどうか、おそらく当分は公表されないのではないかと思います。それを待たなければ林彪事件についての真相はまじわらない。

私はやはり今回の政治報告などを見て、林彪事件そのものは二年前に解決された事件であるのに



中嶋氏

もかわらず、この問題がいかに党内に深刻な傷を残していたかということ、それから林彪のグループに対する闘争は非常に激烈な闘争であったということ、周恩来報告そのものがまざまざと思ひ起こさせるわけです。

そのことも含めて、どうも林彪事件そのものにもまだまだ謎が多いように思う。まず第一に、今度の場合は林彪個人に的を絞っているわけですが、黄永勝をはじめ非常に多くの軍人が同時に失脚しているわけで、それらの人々の罪状は林彪事件とどう関連していたか、ということも明らかになっていません。

私は周恩来の政治報告を読みながら、同時に九全大会の新聞公報や林彪の報告を見ましたが、あのときは林彪が出てくると会場が興奮のつぼになったとか、林彪の政治報告を読めば読むほど問題がみんなわかり、歓喜がわいてきて、代表がみんな喜びにあふれていた、というような表現があっただけに、やはりこの問題はいろいろな大きな影を残していて、この影響力の一掃ということに、この間中国は非常に苦悩したのではないかと。

それから考えてみると、文化大革命というのは、ある意味では毛沢東主席は当時党内では少数派であって、むしろ劉少奇をはじめとする実権派にガッチリと党内が固められていたが故に、ああいう形での奪権闘争に進んだわけですが、これはまさに林彪が毛主席の忠実な戦友として、軍の中

で早くから毛沢東思想の工作を進めてきたからこそ、毛沢東が文革の奪権に成功し得たということがいえると思います。

しかも奪権闘争の過程で、軍が全面的にあらゆる場面にでていったわけで、そこにおける林彪の指導力というものは、いかに林彪が今日批判されようとも、客観的な事実として残っているわけですから、そういう経過のうえに今度の事件が起きているだけに、その説明においても、かなり困難なところがあったのではないかと気がします。

九全路線踏襲の矛盾

豊原 ただ周恩来政治報告の中で、林彪がああいう地位を占めたことよってあまりにも自分の力というものを高く評価しすぎた、逆にあまりにも低く人民の力を評価した、その結果ああいう陰謀をめぐらせた、ということはいっていますね。しかしいざいざにしても、疑問はぬぐえないと思います。

井上 林彪が九全大会で党中央の方針に反したデタラメな政治報告をしようとして、それを党中央から反対され、毛沢東主席が自ら作った政治報告を読み上げた、というわけですが、そういうデタラメなことをやった林彪を、なぜその後の党規約で後継者に指名したかということも、ちょっとつじつまが合わないような気がします。

豊原 ただ九全大会に出てきた代表は、今度の十全大会よりもはるかに多かったですし、しかもそのうち半分が軍人で、その軍人のうちの六〇%が林彪系の軍人であった。そういうバックをもとにしているから、いまいったようないきさつがあったにしても、そこで林彪を排除することができなかったという大きな背景はあったと思います。

中嶋 要するに九全大会というのは、明らかに林彪路線だといえるわけです。しかも人的に見ても、代表は林彪系の人だったという事実があるだけに、今回は九全路線を踏襲しながら林彪を一掃するということに、問題のむずかしさと説明の困難さが残るのではないですか。一般に林彪の罪状の一つとして、自分の権力欲、あるいは個人崇拜をおおって、そのことよって、やがては自分も同じような立場に立とうとした、というのですが、九全大会の報告自身も、毛沢東の語録があとに引用されて、毛沢東賛歌がたくさんあるわけですよ。毛沢東が自ら起草したとすれば、毛沢東自身、九全大会のあの報告では自分への賛歌をおおったことになるんです。だからこの辺の周恩来の報告というのは、もう少し時日の経過をみないとなんともいえないのではないのでしょうか。

豊原 あの政治報告をよく読んでみると、報告の重要性は、林彪事件の罪状をあげくよりも、むしろこの林彪批判運動を通じて修正主義に対する内

外の闘争を盛り上げることにあったのではないかと思います。先ほど中嶋さんがおっしゃったソ連に対する憎しみを、林彪とソビエトを修正主義という共通点において結んで、そして中国人民に林彪への憎しみ、即ソ連への憎しみだ、というねらいもあったのではないかと気がしますね。

林彪事件とソ連との関係

井上 周恩来政治報告のなかでも、林彪がソ連修正主義の指揮棒に従って活動した、というようなことをいっていますね。林彪事件とソ連との結びつきについてはどう考えられますか。

中嶋 私はその点については、前から一貫して疑問を持っているわけです。これは林彪がそれほどの影響力を持って、しかもそれを公式の場で認めたが故に、その影響力を排除するためにはまさに四十数年にわたる罪状が必要であったのと同じように、やはりソ連との結びつきという、現在の中国にとって最悪のレッテルをはる以外に、この事件に対する処断の仕方がなかったということであって、いろいろな経過から見ると、林彪が初めからソ連と結んでいた、指揮棒で動いていた、とはいえないのではないかと思います。

同じことは、先ほど豊原さんが指摘された、生産第一主義を林彪・陳伯達の路線であったということ、むしろ今回は周恩来が革命主義的な傾向を非常に強調しておりますが、この点についても疑

問が残ります。

井上 生産第一主義というのは、八全大会のときに劉少奇が打ち出した路線ですね。それが九全大会でひっくり返されたわけで、そうすると林彪は劉少奇と共通項にいた指導者だということになるわけですね。

豊原 だから劉少奇を党から除名したときの理
由づけと、そういう面では全く一致していること



中国共産党十次全大会 中国通信

ろがあるわけですね。そうしますと、ますます文化大革命そのものもおかしくなってくるし、林彪が率先して劉少奇の追い落としに力を尽くしたとわれわれは考えているわけですが、公表されてみると、二人は実は共通点があつたんだ、全く一緒だったというような罪状として党籍を剝奪されたわけですね。

中嶋 やはりそういう疑問はわれわれだけではなくて、中国の民衆の中にもおそらく残っていると思います。そうであるが故に、林彪がいかに多数の罪状を犯してきたかということ、ソ連に対する批判を強調せざるを得なかったという感じですね。

周恩来政治報告自身、いつもの周恩來の報告と違って、かなり余裕がないような気がするのですが、そこにも何かそういう感じが現れておりますし、それから林彪がソ連と結んだということになると、林彪が一九六五年に発表した「人民戦争の勝利万歳」、あのトーンがいったい何を意味するかということになります。あれは、ご承知のように羅瑞卿との対抗上、まさに人民戦争の論理によって、しかも九全大会のときのあの路線に明らかかなように、対ソ対決ですね。特に戦争に備えよ、災害に備えよという状況の中で、かなり軍は、私の見方では逆に対ソ対決で先走っていたような感じが
あり、どうも今度のことはその点でもすっきり
しない。

ポスト毛の布石

井上 今度の新しい党の指導体制ですが、毛沢東を主席とし、副主席として周恩來首相ら五人が選ばれたわけです。八全大会までは、副主席は複数制だった。それが九全大会で林彪一人となつて、このときにはもっぱら毛・林体制ということが謳われたわけですが、今度はまた副主席が複数制に戻った。

この点について、毛沢東主席と周恩來首相による指導体制の確立、あるいは毛主席を中心とする集団指導体制の確立という見方がありますが……。

中嶋 あるいはもう一つつけ加えて、周恩來がすべてをやっているという見方も一部には出ていると思います。その三つを考えると、私は毛・周体制の確立と、集団指導体制とは、それほど矛盾しないだろうと思います。やはり周恩來が非常に大きな政治力を持っていることはだれの目から見ても明らかです。しかし第三の見方については、あとでお話しますが、今回の報告その他を見て、私自身は、かなりいろいろの疑問を持っておられます。ともかく新しいリーダーシップを考えてみると、九全大会が副主席を一人にしたというのは、まさに林彪の罪状にあげられているような異常なことであり、この十全大会でいわば正常に復帰したといえるのではないか。

正常に復帰したけれども、周恩來は政治報告を

やっております、俗な言葉でいえばだれが見てもナンバー2であることは明らかです。しかし、さすがは周恩来でして、そのことを制度的に明記することを避け、同時に劉少奇ないしは林彪のケースに見られたような、いわば権力の集中を避けながら問題を処理しようとしている。後継者問題の教訓をずいぶん考えたのではないか。

それからさらに進んで、今回の十全体制を全般的に見ると、やがて来るであろうポスト毛の時代、



中国通信 毛主席の十全大会

いわば、中国の新しい時代へ向けての布石といつか、そういう点においての人事構想だということにはつきりしていません。しかし、今回の新しい指導体制が、今後長期的に継続的なものかどうかについては、私はかなりまだ問題があるように思いますし、当面、過渡的な集団指導体制だというふうに考えていいように思います。

若返り人事に二つの見方

豊原 私も同じ意見ですが、今度の十全大会に集まった一二四九人の代表の中に、いわゆる労農兵が六七%も占めていることも注目されることです。文革以来、大衆に依拠するということを盛んに強調してきたわけですが、今回いわゆる大衆代表というものを党大会代表に多く選び出してきた。そのことは、大衆をむしろ主人公にせざるを得なくなっている、いまの中国共産党の立場が、十全大会にしてようやく出てきたのではないかと感じられます。

井上 一中総会で選ばれた五人の副主席のなかに、若手のホープとして王洪文が選出されました。この人は上海の紡績工場の労働者で、文革で非常な功績を示し、九全大会で中央委員にまで選ばれ、今回はさらに十全大会の副議長にまで選ばれて、党規約の改正報告という重要な役割をあたえられて、党副主席という重要な地位に躍進して注目されていますが、このことは何を意味するのか。中嶋 二つ考え方があって思うんです。一つはいわばまともな見方といえますが、当然、現在の中央の指導体制そのものを若返らせる、同時にポスト毛に備えていわば新しい血液を流入するということ。これは従来からいわれたことであって、その代表として王洪文が出てきたというふうにも考えられます。

同時に、若干ずるい見方というか、ひねくれた見方をすると、王洪文という人はある意味ではまだまだ未知数でもあるし、非常に言葉は悪いんですが、もしかするとあて馬的な存在ではないかという感じもぬぐえない。というのは、従来の党規約改正報告を見てみると、これは中国共産党の歴史の中でも確かに大きな役割を演ずる。だが同時に七全大会の劉少奇、八全大会の鄧小平という党規約改正報告を行った人物が二人とも失脚した。鄧小平はのちに復活したけれども、同時に政治報告を行った当事者も前二回とも（八全大会は劉少奇、九全大会は林彪）最悪の分子にされたという、非常に緊張感を伴った中で、だれがこのポストをやるかということは、中国の首脳の中でもいろいろ論議があり、配慮があったと思います。

張春橋と王洪文

そこで、私はむしろ張春橋の方をかなり注目しているわけですが、仮に張春橋が党規約改正報告をしたとすれば、これはだれが見ても今後の集団指導体制の中核を占めるいわばナンバー3と感じると思います。張春橋はそれだけの活動力もあります。しかし、そういう形で問題を設定することが、これまでの後継者問題、その他、現在の中国のかかえている問題からして非常に問題を残す。それを避ける意味でも、むしろ若手のホープと思われる人を党規約の改正報告にあてたのではない

てみると、そのとおりであったということになります。だが、王洪文にしても、それから張春橋は副主席にこそならなかったけれども、九全大会のときに周恩来がやった、大会秘書長という非常に大きな役割を果たしており、これまでの着実な成長から見てもかなり余裕のある成長ぶりです。そういうことを考えるならば、同じ上海グループでも張春橋なり王洪文よりは、いわゆる文革造反グループという狭い立場からだけではなくて、かなり実務派の党官僚、あるいは行政官僚、それから軍ともかなり連携し得る、そういう幅広い基盤で成長してきている人物ではないかという気がします。そうであるが故に、これらの人はこのような激動の中で新しいポストにつき得たのであって、これを上海グループなり造反グループという形だけで見て考えるのは、どうかという気がします。

しかも全般的に見ると、どうも文革グループの躍進という評価はできないと思います。いまいったように、王洪文、張春橋の両氏がもっと幅広いところで成長しようとしているような人物ではないかという気がしますし、一方でウランフ、譚震林という、これは文革のときにかなり激しく「モンゴルの劉少奇代理人」とか、譚震林にいたっては「広州の譚震林」といわれて、他人に対する代名詞にもされるような人物、こういう旧実権派の領袖が復活してきている。中央委員の中にも注目

すべきは李井泉、それから李葆華というかつて中共書記局が地方にあったときに非常に根を張っていた実権派が復活してきているところから見て、どうも王洪文の躍進・イコール上海出身・イコール造反派・イコール文革グループの躍進という見方は、あまりにも単純すぎるのではないかと思います。

旧幹部復活の意味

井上 文革で批判された古い幹部が復活していますが、それは脱文革を意味するのでしょうか。

豊原 これは毛主席自身もいつているように、「病いをなおして人を救う」という方針に沿った措置だと思ふ。文革のとき激しい批判を受けたが、それから数年間、彼ら自身も自分の行動を自己批判し改めてきた。反革命のような大罪を犯したものはともかくとして、普通の過ちを犯したものは批判―団結―批判の精神にもとづいて、批判された幹部でも再登用するという党中央の弾力的な姿勢を示したものだと思ふ。

特に経済の建て直しは当面の急務であり、その場合には元の経済閣僚を含めた、そういう旧幹部の復活を含めて、そして経済政策をこれからの中心議題にやっていくには、こうした弾力的なやり方をせざるを得なかったと私は受け取っております。ただその中で、十全大会が開かれる前に注目された人物、たとえば陶鑄とか賀竜は依然として

出てきていない。しかし陶鑄の夫人は名前が出てきているから、完全に失脚したかどうかは別としても、とにかく、もう少し出てくるのではないかとと思われる人物が出てこないという点もありますし……。

中嶋 李富春なども従来のキャリアからしますと、今党中央委員にはなっていますが、政治局入りしていないんじゃないですか。

豊原 経済閣僚でも、たとえば対外貿易相の白相国などは今日活躍しておりますが、確か中央委員にも選ばれていないですね。これはかつての体制から見ると、閣僚クラスの人はみな中央委員に入っていますが、今度は白相国という日本にも名前の知られている貿易担当の閣僚が中央委員にも選ばれていないということなども、ちょっと疑問といえれば疑問ですね。

中嶋 その辺はある意味では文革とはなんであったかということになります。今回の周恩来の政治報告なり、十全大会の党内そのものを見て、やはり文革が深刻な党内闘争であったということでは明らかですが、文革が持っていたであろう思想的な意味というものが必ずしも前面に出ていないような気がします。いわば文革というものは、予想外の林彪事件をもたらしつつあったが故に、いま中国の人たちは、本心では文革を一場の悪夢として忘れ去ろうとしているような雰囲気を感じざるを得ませんね。

そうしますと、文革が仮に一場の悪夢であったとすれば、文革で批判された人たちの復権というのはある意味で当然でして、一つの脱文革という方向は、全般的なトーンとして出てきているのではないかという気がします。

「老」は後見人的立場

井上 しかし、旧幹部は復権しても以前の地位には返っていないわけです。ランクが低くなっている。今度の新しい党の最高指導部の顔ぶれを見ても、批判された人は入っていませんね。だから復活は許しても、最高責任者という地位までの復活は認めないというところに、復活の限界というものがあるのではないのでしょうか。

豊原 老・壮・青の三結合という立場から考えて、復活組はいわゆる老ですから、ここで後継者養成というのを考えたときに、老はむしろ後見人的立場に置く、そしてその持てる知識、経験というものは大いに活用しようという考え方ではないのでしょうか。



鄧小平



李井泉



廖承志

井上 今度の中央委員の顔ぶれを見ますと、労働出身の中央委員が非常にふえていますね。「農業は大業に学べ」の山西省の大業の陳永貴が今度は政治局委員になったのは代表的な例でしょうがそのほか中央委員の中にも農民出身が多いようです。労働者出身は王洪文をトップとして、中央委員に多数出ている。それともう一つは軍人が非常に少なくなりましたね。

豊原 少数民族の代表というのを入れてきたんですね。

井上 そういうような中央委員の顔ぶれから老・壮・青の三結合、労働兵の三結合が特徴としてみられますが。

中嶋 私は労働兵三結合、それから老・壮・青の三結合、これは論理のうえではかなり違うわけですが、いわば縦軸と横軸みたいなものです。こういうものが今後の中国共産党の中で定着していくとすれば、たいへん明るい情勢が出てくるのではないかと。ですから、いまの労働兵の問題にしても、あるいは従来九全体制自体があまりにも

異常であって、いわば軍人体制みたいな状況でしたから、そういうもの修正という点では、やはり大きな意味を持つのではないかという気がします。

だから全般的に、いまの問題であるとか、それから指導層の中に新しい血液が出てきている問題とか、それからあまりにも異常であった毛沢東個人崇拜みたいなところが取り払われていくとか、そういうことも含めまして、十全大会の中にはまだわからないナゾの部分、いろいろの問題を持っている中国の苦悩と、同時に着実な発展という明るい先明というものも見られるわけで、その両者がまだまだ混在している時期で、そのプラスの面として今の問題は評価できるのではないかと、という気がします。

豊原 今度新しく改正された党規約の前段の総綱、いわゆる総論にあたるところはよく読んで見ますと、全部毛語録の焼き直しですね。しかも一番最後には「犠牲をおそれず、万難を排して勝利をたたかいたいとなければならない」ということで結んでいます。また新しくつけ加えたことも「われわれはマルクス主義をやるのであって修正主義はやらないこと、團結するのであって分裂してはならないこと、公明正大であって陰謀術策をめぐらしてはならないこと」という新しい林彪事件後の毛沢東語録が規約の中に入ってきたことからみて、かつての九全大会の規約のように、毛主席の名前そのものは出てこないし、毛沢東思想というのが一回出てくるだけです、やはり全般を通じて毛主席の權威というものをさらに高めようという現れは十分に読み取ることができます。

軍の比重の後退

井上 中央委員の顔ぶれを見ると、今度の中央委員一九五人のうち、解放軍が五九人、前回の九全大会のときの中央委員は一七〇人中七四人、四三%を占めていたのにくらべて、非常に後退している。人民解放軍は文革において大きな役割を果たし、あれだけ乱れた国内の情勢を紅衛兵の活動を抑えて秩序を回復し、革命委員会や党組織の中で重要な地位を占めていました。軍人出身の中央委員が減ったということは、林彪事件と何か関連があるのか。あるいはまた毛主席がいつているように「党が鉄砲を指揮するんであって、鉄砲が党を指揮するのではない」ということが具体的措置としてとられたと解釈すべきかどうか。

豊原 今度の中央委員の顔ぶれを見ると、軍と幹部と造反派が三〇%ずつぐらいで均衡されたわけです。九全大会は林彪の権威を高めるといふことから、あまりにも異常であった。それを元に戻しただけであって、林彪事件後にも中央の政治局にいた陳錫聯とか、許世友という人はそのまま入っているし、あなたが軍の権威が全部こでなくなってきたというふうには私は見ないんです。それともう一つ、王洪文という人は実は日本にもあまり知られてなかったが、卓球大会の開会式に出てきた写真が日本へ届いてみますと、赤い袴章のついた解放軍の制服を着ておりますね。彼は

経歴から見れば、上海の紡績工場の一介の労働者であったはずですが。軍の経歴などは全く日本に伝わっておりませんが、その辺も中国のいまの軍の立場には、われわれにわからない何かがあるような気がします。それだけにきちんと日本流に軍が何%何%と分けるやり方が、果たしていいかどうかという気がします。つまり林彪系を排除した結果がそういうふうになってきた。それと同時に、党が鉄砲を指揮するのであって鉄砲が党を指揮するのではない、ということ、林彪事件後さかんにいわれてきたことですから、その理想を実現するためにも、当然軍の進出は減ってきたということはいえると思います。

中嶋 李徳生は解放軍の総政治部主任、そういういわば党人派でありながら、軍に影響を持つような人たちが、うまく軍との関係をつくりながら、今後の中国共産党は、いわば鉄砲が党を指揮することの危険をまざまざと知ったわけですから、克服していく方向にいくだろうと思います。

党が軍を指揮する

ただし振り返ってみると、林彪はあれほど全軍を支配していたといわれながら、林彪の躍進がまた軍の中においてもかなり異常だったですね。五年に林彪が国防部長になったときも、私はちょっと意外な感じがしたくらいです。そういう状況の中で、急激に軍の中で大きな力を占めてきたと

思われていた林彪にしても、軍全体を掌握していなかったということです。もし全軍を掌握していれば、林彪は陰謀計画に勝利したかもしれない。そういうことが一方で考えられるわけですから、その辺はわりあいうまくいくことになるのではないかという気がします。

ただ気になるのは、陳錫聯、許世友というような地方に根を張った、いわば地方に盤踞している軍の動向ですが、この辺は仮に今後問題が出たとするならば、何か大きな問題を提起するかもしれませんがね。

豊原 そうですね。林彪事件後に展開された三八作風の徹底運動、三八作風の歌を解放軍が始終歌って行進するようなことを盛んにやっていたわけです。林彪系ではないといつても、末端の軍隊にしてみますと、国防相である林彪、しかも後継者であった林彪というものが、いつの間にか失脚しているということになれば、おそらく動揺があったと思います。ですから、よけいにああいう三八作風によって、もう一度解放軍は党の指揮のもとにやっていくんだということを徹底させたと思うのです。

それに先ほども申しましたような批林整風運動をひっくり返して、二年間かかってきたわけですから、もう軍としては末端に至るまで、一応そういう党の姿勢というものを十分認識して、党の指揮のもとにやっていく体制ができたのではないんで

でしょうか。

ただ、いまいったように、まだあれだけ大きい国であり、またかつての歴史を見ても、地方軍閥というものの根強い伝統が、全部一掃されたとは思いませんから、疑問も残るし、今後はそういう争いは全然なくなつた、絶対安心だということはいえないとは思いますが、一応体制的には党が軍を指揮するという立場を地方軍区もみな認識している段階ではないでしょうか。

政治情勢は安定に向かうか

井上 今後の中国の政治情勢についてですが、結局、党内から林彪という大ボスをはじめとする反革命派を除去して新しい指導体制を確立したわけです。党の政治路線としては、九大大会の政治路線の正しさを確認して、それを継続することが明らかにされた。しかし、政治報告の中でもいわれておりますように、階級闘争や資本主義と社会主義の二つの路線の闘争は、今後社会主義建設の過程においても引き続き存在する。したがって、今度の文革のようなことも今後一〇回、二〇回、三〇回と現れてくるだろう、というようにも指摘されているわけで、この文革の終結と林彪事件の決着によって、果たして中国の政治情勢が安定に向かうかどうかということが大きな問題だと思いますが。

中嶋 一番重要な問題でしょうが、私は十全大

会は確かに問題を凍結し、当面の段階において問題を調整したという点で、非常に大きな意義があると同時に、政治報告にも示唆されているように、今後に問題を残していると思います。

考えてみると、林彪事件が起こつた一九七一年九月以降も、いわゆる俗な言葉でいえば、穏健派的な論調と、それに対する批判と思われるような論調が、人民日報や「紅旗」の中にも継続してチラチラ見られてきておりました。全般的には十全体制的な路線は、批林整風という点で一致して問題を処理していくものと思いますが、まだまだかなり問題は残っている。ある意味では今回の人事の中にも現れたような、江青女史とか姚文元氏とか、いわゆる文革ラジカルといわれたような人たちが、今後どういうふうな問題を立ててくるかということも残るような気もするが、その点は今後もう少し問題を煮つめていく必要があるのではないかと。

しかしいずれにしても、今回の大会で明らかのように、中国はやがてポスト毛の時代を迎えるわけで、それまでの間とはかく一刻も早く、過渡的にせよ集団指導体制をとりたいという欲求が強いと思うので、そこまではそれほど大きな問題は起こらないかもしれない。ただポスト毛というような状況まで考えて、現在の体制がそのままつきり継続するかというと、私はいままでの例から見てもそう思われなような様相があるのではないかと

いかという気がします。

豊原 今後も批林整風運動を前面に押し出した社会主義教育運動を展開する、とはつきりいつているわけです。ですから、国内ではまだこういう厳しさというものはずっと継続すると思います。

ただ政治報告の中でこういうことを周恩来はい言っております。「社会主義革命と建設は、大きな成果を収めたとはいえず、常に客観情勢の要求には追いつかない。」このことが何を意味するか、これには第四次五カ年計画も明らかにされていないし、経済面でも立ちおくれしている。それと同時に、こうした社会主義革命が成果を収めながらも、客観情勢に追いつかないというところから米中接近もあつたでしょうし、日中の国交正常化もあつたと思います。その理由づけをこういう表現にしたとは思いますが、それだけに国内的に見た場合、また中国の外交面から見た場合にも、今後にかかえる課題は非常に大きいのではないかと気がします。

人代で憲法改正か

井上 今度の政治報告の中でもいわれていますが、全国人民代表大会を近く開催するということが、国家機構とか第四次五カ年計画などが全国人民代表大会で打ち出されるのではないかと思います。

豊原 文革によって、国家機構が党の機構と同

様、破壊されてしまったわけですから、その建て直しが重要な議題でしょうが、文革以来いわれている「精兵簡政」という言葉、そして最近いろいろと伝えられる閣僚の復活などを見ても、國務院のポストが「精兵簡政」的にかなり省略化されていると思います。それがどの程度明らかになるか注目されるところです。

それから、第四次五カ年計画ですが、もちろん人代では明らかにされましようが、外国にどこまでそれが伝わるかということも私が興味があると思います。

井上 今度の人代で憲法改正が出るのではないかとという観測もあります。いまの憲法は新民主主義時代の憲法で、それからずっと変わっていませんが、実態はすでに社会主義革命に入っているということで、憲法改正はどうしても取り上げなければならぬ時期にきていると思います。

豊原 これは当然だと思えますが、憲法改正については、その草案というものが林彪事件が起こる前に国外に流れてきたことがあります。この憲法草案にも、党規約と同じように林彪を後継者とするとといった字句が入っていましたけれども、草案が正しいとすれば、林彪の個条を除くだけで、党規約と同じようにあまり大きな変更はないとみられる。そしてその骨子は、社会主義革命のための文革を継続して行っていく方針を貫いたものになると思います。

中嶋 私もそう思います。ただし、人代が開かれ、憲法が決まるということになると、当然国家

主席を任命しなければいけない。それと同時に國務院も新たに任命し直すわけです。とすれば、国防部長も任命し直さなければいけない。果たしていまの中国国家機構の人事空白をどういうふうに埋めていくか、非常に興味のある問題ですね。たとえば考えられる形として、周恩来が国家主席になるのか、まさか王洪文が国家主席になると思いませんが、毛沢東主席が兼任するのか、その辺かなり大きな問題だけに、意外に非常に新しい形が出てくるのかもしれないし、全般的な集団指導体制を反映した国家行政機構ができるような気もしますし、人事面ではどうもまだまだ煮つきっていないような気がします。

豊原 七〇年八月の二中全会で、林彪を国家主席にしようとしたことから陳伯達が失脚していったと伝えられているわけですが、あのときの論議の中では、毛主席がもう国家主席は置かない、といったといういきさつもあるわけです。

中嶋 ぼくのいった「新しい」というのも、そういうことを含めてですよ。かなり根本的な変化が起こるかもしれない。

豊原 その後に董必武を国家主席代理としてはっきり任命しましたね。もし国家主席を置かないのなら、あの段階で何も八六歳の董必武を登用して国家主席代理の肩書きをつけなくてもいいとい

う気もしますし、はたして置くか置かないかという点も、大きな興味の焦点でしょうね。

中嶋 あるいは董必武のような人が国家主席になるかもしれませんね。

外交路線の行方

井上 今度の政治報告は「情勢と任務の遂行」の中で「現在の国際情勢は天下大いに乱れる」というように判断している。それが中国外交政策決定の基礎となる一つの大きなポイントではないかと思えます。それからもう一つは、米ソ二超大国による覇権主義に反対する広範な統一戦線を呼びかけていることです。

こういうことから見て、中国の外交路線全般について、今後変化が起こり得ると考えられるかどうか。

中嶋 結論から先にいえば、大きな変化は起こらないであろうということです。すでにソ連に対する批判、それから一方で米中接近、日中復交に見られたように、欧米諸国との国家外交を積極的に展開するという路線が現在の中国に定着しているわけですし、それについては周恩来首相が大きなイニシアチブを発揮してきたわけですから、この点でも大きな変化は起こらないのではないかと。むしろ当面、ソ連との関係ですが、今回の政治報告はソ連の不意奇襲に対して十分な警戒心を持ち常にこれに備えなければいけない、という条項が



十全大会会場に向かう代表たち

PANA

入っているわけで、この点はかなり問題になると
 思いますが、一方で周首相は、ソ連との国家関係に
 ついては平和五原則の適用を強調していますね。
 というように見ると、ソ連との関係はいわば中ソ
 全面戦争という抑止限界ぎりぎりのところで非常
 に激しい対ソ批判を繰り返しながらも、この点で
 のリスクは避けていくのではないか。

また当面国内の団結のために、いろいろ問題
 が残っていることを調整指導するためにも、対ソ

批判を継続する必要があるわけで、一部にいわれ
 るように周恩来首相が国家外交を展開すれば、ソ
 連との間も調整されるのではないかと見るのは誤
 りであって、まさにその国家外交を展開し、アメ
 リカとも接近し、日本の財界とさえも接近する中
 国の必要性を論理化するためにも、対ソ批判が必
 要になってくるであろうと思います。

もとより私が申し上げたのは、単に言葉の上の
 対ソ批判ではなくて、最近北京では大規模な地下
 壕ができていくわけですし、こういうことを含め
 て、まさに中国の国防増強、それとともに生産建
 設ということに結びつけた形での問題の設定がな
 されてくるのではないかという気がします。

対ソ関係にも慎重

豊原 周恩来政治報告のなかで、平和五原則を
 前提とするならば話し合いによって解決できるん
 だ、といういい方、また中ソ国境問題もはっきり中
 ソ国境問題と出して、いかなる脅威も受けない前
 提のもとで、交渉を通じて解決できるんだという
 ことも打ち出しているわけですね。従来の対ソ強
 硬一点ばかりではなくて、原則的には平和五原則と
 いうものを前提にすれば話し合い解決が可能、と
 いうことを言い出したことは、他の国に対するの
 と同じようなことをソ連に対しても言い出したこ
 とであって、つまりいまの対ソ関係をこれ以上深
 みににはまらせたたくないという意識は、中国の指導

者の中にあるのではないか。それがこういう言葉
 の表現となって現れてきたのではないかという感
 じがします。

中嶋 おそらく言葉のうえではもっとエスカレ
 ーションするでしょうし、ソ修社会帝国主義打倒
 のための生産建設ということは、ずいぶん今後も
 強調されていくだろうと思います。

ただ九全大会のときと違うことは、だからソ連
 に対して一戦も辞さずというような形は避けるの
 ではないかという気がします。ここまで話を発展
 させると、先ほどの林彪に対する現在の中国の公
 式な評価に対する疑問とつながってきますが、私
 はこの問題をこういうふうに見ているわけです。
 九全大会が開かれたのは六九年の四月で、その年
 の二月、三月ぐらいから珍宝島、グマンスキー島
 をめぐって紛争がありました。それから九全大会
 の中で、まさに林彪路線一色の形で、災害に備え
 戦争に備えという状況が、いわば対ソ臨戦体制が
 強化されている過程で、その年の夏に中ソ国境で
 非常に激しい事件が起こりましたね。

むしろそのときに林彪をはじめとする軍は、人
 民戦争の論理によって非常に強硬なリスクをかけ
 たのではないか。しかも国防力の増大を要求し、
 軍事予算の増大を要求しながら、非常に軍が大き
 い発言力を持つようになったのではないか。実はこの
 ことに党官僚であり、行政官僚である毛主席なり
 周首相は非常に脅威を感じて、なんとかしてこれ

を抑えなければというところが、林彪事件の背景にあったような気がするのです。

しかもあのとき、中ソのあの深刻な六九年八月の武力衝突を、とにかく一時的にもせよ凍結させて、コスイギンとも急遽会談し、外交ルートに乗せていったのは周首相だろうと思います。そうすると、どうもいまの周首相の政治報告自身はつじつまが合わないが、周首相のこれまでのビヘビアからすると、その辺のところを十分意識しながら対ソ関係を考えていくのではないかと気がします。

日中関係はかなりよくなる

井上 政治報告の中で「ソ連修正主義と米帝国主義の間の結託、妥協と、革命国家の帝国主義に対する必要な妥協とを区別しなければいけない」というくだりがあります。このことは、中国の対米接近というものも、アメリカとなりふりかまわず接近するのではなくて、米帝国主義には断固反対するという立場を明らかにしたのではないでしようか。

豊原 従来から帝国主義に反対するという立場をとっている中国としては、アメリカも含めてあいつら表現を使わざるを得なかったと思う。しかしその中で米ソが結託していると同時に、米ソが覇権争いをしているということがあるわけです。そしてその覇権争いに対しては、日本、西ヨーロ

ッパの諸国も、これに不満の意を表しているというって、あっさり米ソの問題の中のアメリカをそれだけで打ち切って、日本、あるいは西ヨーロッパの国々のことを引き出ししてきた。そしてむしろこれからの対日姿勢、あるいは対ヨーロッパ姿勢を平和五原則でさらに固めていくんだということを打ち出してきた。これは現在の米中関係の改善から、アメリカは建前としては帝国主義だから反対する、ということでああいうふうになっているだけだと、私は考えます。

中嶋 従来、中国なり社会主義国の対外姿勢論理というのは、いわば国際的な階級闘争、社会主義の団結が表向きの論理ですから、たまたま建前としては今回の政治報告の中にあのようなニュアンスとして出ていると思うのです。しかし、中国自身、やはり現在世界が多極化に向かいつつあるということ、一方ではキッシンジャーの、いわば新大西洋憲章が出てきて、他方でソ連の集団安保体制のようなものが出てくるという、非常に国際情勢が流動化していることから、これは中国にとって非常に興味があることであって、ですから天下大いに乱れるのは結構だということもあります。そういう多極化世界に対して中国外交はかなり積極的に考えていくということになるのではないか。そのために西側とも思い切って接近する、あるいは日中関係は対ソ関係のうえでまだまだ当面かなりよくなるような気がしますね。

それからソ連の方を見ると、従来毛主席に対する批判は繰り返しているが、周首相に対する名指しの批判はほとんどなかった。私どもがソ連に行き、ソ連の学者と話し合ってみても、かなり周首相に期待していたようです。ところが最近プラウダが、周首相個人に対してもかなり批判を展開してきており、それについても中国はますます多極化世界への対応ということを考えざるを得ないのではないかと思います。

アジア諸国との関係

井上 中国は被圧迫民族、被圧迫国家との団結を強め、広範な統一戦線を組み、いわゆる第三の世界を確立し、その主導権を握り、米ソ超大国に對抗する外交路線をとるということを政治報告で強調しているが。

中嶋 ますます中国は、国際政治の舞台において、国家的な次元で、まさに多極化世界に対応せざるを得ないだけに、中国がそういう主張をとっても、従来のようないわば新鮮なイメージとして第三世界側がそれを受け取るかどうかは、かなり疑問があるような気がする。

豊原 たとえば第三世界の中でアフリカ諸国などは、ほとんどが中国に加担しているわけだが、東南アジアの場合には、まだ ASEAN 諸国がどっちつかずという状態ですね。ASEAN 諸国に対する呼びかけの意味からも、あの政治報告は好

影響を与えるだろうことは意識していると思いません。

中嶋 ASEAN諸国を見ても、中ソの接近競争はものすごいでしょう。ですから、第三世界中の反体制支援ということでは世界革命はでき得ない。まさにその体制側自身と手を握らなければいけないということになってくるのではないのでしょうか。

豊原 中国はソ連のアジア集団安保構想に対して強い警戒姿勢を示しており、とにかく田中首相がソ連を訪問したとき、当然この問題は出てくるとみえています。周政治報告が領土を返還する誠意を見せろといったことなどは、多分に田中訪ソをひかえての発言だと思えますね。

井上 いま日中関係が出ましたが、今後日中関係がどうなるか。今度の周恩来政治報告には非常に非常に肩入れをしているようなくだりがあり、周首相自身による首脳外交によって日中正常化がもたらされたことから、周恩来が健在であるかぎり日中関係に今後とも好影響がもたらされるであろうという見方もあります。それから中央委員の中に、廖承志をはじめ知日派がたくさん選ばれているということから、今後の日中関係にとって好ましいことと外務省筋では見ているようです。

豊原 そのとおりであって、日中関係はより安定させたものにしたとか、信頼関係を深めたい

という意識は、政治報告からくみ取ることができると思えます。つまり、対日改善の方向をさらに強く打ち出しているし、日中国交正常化の評価は高いわけですし、そういう面で日本とは今後も信頼関係をさらに深めようという意識だと思えます。ですから劉希文を团长とした経済交流団もきますし、そういう交流はさらに活発にさせていくという意識でしょうね。

日本の外交姿勢は

中嶋 そうですね。通商協定も大詰めで、だいたい妥結したようですし、そういうことになる、現在の中国が対外的にかかえている、一方で多極化世界への対応、その中で対ソ抗争というような問題、これは中国にとっては国防上も必要になつてくるから、そのことを考えて、同時に中国の経済を本格的に建て直していくということからしても、中国は当面日本との経済的結びつきを非常に必要とするだろうと思えます。特に技術協力ということを要請してくるでしょうし、そういう点で日本の財界との結びつきも、いま以上に深まってくるのではないかと気がします。

井上 日本は今後中国と仲良くしていかなければいけないし、一方ソ連ともシベリア開発問題を通じて、経済協力が発展していく情勢ですが、中ソ対立の間にはさまった日本としては、どういう外交姿勢で臨まなければならないでしょうか。

中嶋 そういう中ソ関係が非常にきびしいというのをわれわれは意識しておくことが必要だということが大前提ですね。だが同時に、いわばぎりぎりのところで、かなり戦略的にも、たとえばシベリア開発問題にしても、あるいは中国からの石油の問題にしても、あるいは中国が今後必要とするであろう日本からの技術、これはある意味で軍事技術に対するノーハウの提供にもならざるを得ないこともありますから、経済交流そのものは結構ですが、その辺での歯止めをきちんとしておかないと、日本自身が中ソ対立の中にまき込まれるおそれがあります。

その点でシベリア開発がアメリカの協力のもとにソ日米という形で行われることはある意味でたいへん結構だと思えますし、これはむしろ日本側の問題として、つまり不必要な過当競争をすることによって、中国との経済的な結びつきを深めようという姿勢が歯止めをなくすることになるんで、その点での理性的な対応がかなり必要になってくるのではないかと感じます。

一方、日本は中ソ対立のために中ソももて外交だといって喜んでいて、その辺での歯止めもなくなつてくるので、そういう点で日本の主體的な外交をちゃんと考えていくべきであって、田中首相はこの十月にソ連に行くわけですが、さらに中国にも行くということも必要になってくるのではないのでしょうか。